

ハイドロフォンによる水中音の聴取に関するサウンド・スタディーズ

岡崎, 峻

<https://doi.org/10.15017/4060174>

出版情報 : Kyushu University, 2019, 博士 (芸術工学) , 課程博士
バージョン :
権利関係 :

氏 名 : 岡崎 峻

論 文 名 : ハイドロフォンによる水中音の聴取に関するサウンド・スタディーズ

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

水中音は、我々の身近に遍在する自然現象でありながら、一般に人間の耳でクリアに聞き取ることが困難とされる。本論文の目的は、20世紀前半に実用化された、水中音を可聴化するためのテクノロジーであるハイドロフォンが、近現代の諸文化のなかでいかに水中音を聞く行為と結びつき、その知覚の経験を変容させ、それに基づいて環境や生態系の理解を更新してきたのかを明らかにすることである。そのために、複数の関連分野——軍事、科学、文学、映画、エレクトロニクス、音楽等々——の事例を横断的に取り上げ、さらに私自身のフィールドでの実践を題材に加えながら、その知覚と想像力の系譜を記述する。

一章では、ハイドロフォンという技術の歴史性を検討する。具体的には、軍事的な背景との関わりの中で、それが水中の発音体を聞き分けるための実用的な分析装置として段階的に発達してきたことを踏まえ、ハイドロフォンが特定の音高に共鳴する樂器的形態から、種々の変形を経て、ハイフィデリティな音響特性を獲得していったプロセスが明らかにされる。一方、実用的な文脈におけるハイドロフォンの利用は、やがて機械処理の発達やシステムの大規模化に伴い、聞くという身体的行為から離れていった。こうした歴史的事実から、ハイドロフォンという特異な技術を形成した合目的な意識は、人々の身体感覚と水中の音空間を創造的に結びつけた一方で、最終的に再びそれらを切り離すという両義的な影響を与えたことが判明する。

二章では、ハイドロフォンによる水生生物の音の科学的理解の進展に伴う、それらの音世界に関する社会的表象の変容を検討する。かつて水生生物の音についての科学的知識の記述は、現実の水中環境の音の経験と結びついていなかった。しかし、ハイドロフォンの軍事利用に伴い偶然に甲殻類の音や魚類の音が発見されると、科学者はそれらの音の調査・分類に乗り出し、海中の音環境の理解は一気に分節化されることとなった。また、そうした成果が新聞や映画等をつうじて共有された結果、戦後の短い期間に、それまでの沈黙の印象にとってかわって、生物の音であふれた「騒々しい海」というイメージが形成されるに至った。一方、それから間もなくして発見されたクジラの声は、LPという形態を発端として豊かな音楽的解釈を生み出すとともに水中音をエコロジー思想と結びつける契機をもたらした。このように、本章ではハイドロフォンを用いた科学的研究が、単に客観的な事実を解明し知識を蓄積するだけでなく、水中空間の聴覚的な経験や想像力といった側面にも密接に関わってきたことを明らかにする。

三章では、ハイドロフォンと芸術との関わりに焦点を当てる。近代化に伴う音響技術の台頭に際して、多くの芸術家が耳に聞こえない潜在的な「音」の可聴化に興味を抱いてきたが、その対象には水中の音も含まれていた。一方、戦後の軍事余剰品の転売やDIYといった流れからハイドロフォンの脱専門化が起こると、一部の音楽家やアーティストはそれを自由に用いて水中音のフィールド調査を行い、作品を制作するようになった。本章では、そうした作品のうち代表的なものを取り上げ、そこに彼らの聴取の経験がいかに再構築されているかを読み取りつつ、それに伴う音の意味作用や聴取のコンテキストをめぐる問題を明らかにする。また、それを踏まえたうえで、作品をあえて実体化せず、水中音を聞く行為それ自体への回帰を志向するようないくつかの芸術実践を併せて取り上げる。総じて、これらの実践の系譜は、科学と相補性を成すような柔軟なやり方で、水中の音という環境の素材から美的ないし没入的な経験を生み出そうとしているだけでなく、その聴取の経験の認識論的側面を個人のレベルで問い直すようとする動向であることが主張される。

四章では、身近な水圏のフィールド調査に基づく著者自身の体験的なエピソードを記述するとともに、ハイドロフォンをとおして水中音を聞く経験の理論的な特質が改めて問い直される。具体的には、海や川、池といった異なる環境間での音のパターンの違いや、聴取の経験を重ねることによる聞こえの変化、そして著者が数度開催した水中音を聞くワークショップの参加者による感想などを取り上げる。本章ではこうしたドキュメントを題材として、ハイドロフォンの利用における知覚を異化するような性質——聴覚情報を他の感覚情報から切り離し、さらに増幅作用により音の細部を強調する——や、水中音の未知性によってもたらされる原始的な聴取の状態——対象についての理解が曖昧であるゆえに、聴取者の経験的・科学的知識がその聞こえに大きく影響するとともに、音に聞き入ることが環境を知る大きな手掛かりとなる——について検討し、これまでに取り上げてきた種々の社会的表象との関わりが考察される。

結論部では、ハイドロフォンを身体の延長とみなす立場から、それがもたらす新たな感覚についての「音響認識論」の探究として本研究が位置づけられる。水中の音環境は、さまざまな点から空気中の音環境とは異なる体系に属する現象群であり、一般に我々はそれらの構成要素や響き方について不慣れな状態におかれている。そのため、人々はそれを聞き取るとき、習慣的な知覚や思考のパターンから遊離した不確実な聴取の状態からスタートし、知識や経験を重ねながら、さまざまなコンテクストに応じた独自の解釈を徐々に確立していくことになる。ハイドロフォンによる聴取の系譜には、こうしたプリミティヴな感覚の変容のプロセスが複層的に刻まれており、それは環境音を聞くという日常的なプロセスのリアリティと根源性を改めて我々に問いかけるであろう。